

給茶器設置も 可能か

CASE 4 学生をエコ化する 計画、推進中！

商学部の学生が中心となって、学生全体にエコ意識を広げる活動があります。それが『e c o 商プロジェクト』。明治大学内の売店「明大マート」でレジ袋削減を目指すなど、さまざまな運動を展開中です。

山本悠貴(商学部 3年)
Yuki Yamamoto



エコバックで買い物をする学生

キャンパス内は エコ設備が充実



明大マート内に
掲示したポスター
シリーズ

現在、森永由紀教授のもとで実際に取り組んでいるのは、明大マートにおけるレジ袋の削減です。必要と申し出た人だけに渡すことで、レジ袋の削減を図りました。

2008年、2009年の新入生にはエコバッグを配布したり、レジ袋削減を訴えるポスターを掲示したりしました。その結果、この活動の前後でレジ

袋の利用は約30%も減りました。「環境問題と私たちの生活は、密接に関わっています。日常では当たり前になっているケースも多いのです。だからエコな大学、エコな社会を作るために、一人一人のライフスタイルを変えていくことが必要です。私は『e c o 商プロジェクト』を通して、学生一人ひとりに大切なことに気づいて欲しいと思います。」(参加した学生)

今後は、学内におけるペットボトルの使用量削減を目指したプロジェクトを予定しています。一般的なコンビニエンスストアの売上の約15%が、ペットボトル飲料という調査結果もあり、広く利用されているからです。学内のペットボトル削減

のために、校内に給茶器の設置を提案することを検討中です。

このように、学生生活の中でできる環境への配慮について提案し続けることが、環境意識の向上につながり、ひいては社会に対して、環境意識向上のメッセージを発信できる大学になると考えています。

袁輪由貴(商学部 3年)
Yoshitaka Minowa

CASE 3



商品デザインも自分たちで考えました

大学生の、大学生による 大学生のためのお菓子

マーケティングを研究している学生たちが、国内大手の菓子メーカー・株式会社ロッテとお菓子作りでタイアップ。学びの場をビジネスの世界に求めました。

ロッテの新商品を 開発させてください！

ガム、チョコレート、キャンディ、ビスケット……。こうしたお菓子を手に掛け「お口の恋人」のキャッチフレーズでお馴染みの株式会社ロッテ（以下略ロッテ）と共同プロジェクトに取り組んでいます。

ほうれん草 チョコ

こうして新商品提案のプロジェクトがスタートしました。

ロッテ側からは、「とにかく学生目線の新しい商品を考えてほしい」との依頼のみで、ターゲットを大学生とする以外全て自由。学生たちは3班に分かれ、約5カ月という限られた期間の中で、今までにないお菓子を提案しようと意気込みました。

具体的にはまず、大学生のお菓子事情を知るために実際にアンケートを実施。その他、従来のお菓子にほうれん草やにんにくなど、今までにない食材を組み合わせて食べてみたりして、色々な可能性を探りました。

そうして迎えた中間報告。学生たちは、自分たちの考えた提案が企業のスタッフにどう映るのか、期待に

その発端となったのは、ある中学校で行われた中学生によるロッテ商品提案授業の場に、商学部の学生たちが同席できたことでした。中学生たちはその場で、「絶滅危惧動物と環境保護に焦点をあてたチョコレート菓子『アニマル サク×2』や「噛んでハッピーな気分になれる！おいしく楽しいベリーハッピー」『BERRY3』(実際に商品化され、限

胸を膨らませました。しかし、彼らの目線は提案内容を吟味する前の、提案の形式に向けられました。冗談交じりやしゃべり口調といった学生くささが抜けていなかったのです。「普段の活動とビジネスの現場との違いを肌で感じました。」(参加した学生)

その後の定期的な進捗状況の確認の場でも、企業のスタッフからは厳しい目が何度も向けられました。

「自分たちの中では十分に準備したつもりが、いざ提案してみると、不足だらけでした。」(参加した学生)

社会人がプレゼンテーションに求める準備のレベルは高く、この経験を通して学生たちは、一つ一つに対するキメの細やかさや、イメージやアイデアをいかにしてお菓子に落とし込むかといった、商品を考え抜くことの難しさを学びました。また、時には自分たちの考えを伝えることの難しさにもぶつかりました。こう

した活動の繰り返しの中で、学生としてだけではなく、一社会人としても成長しました。

最終的には3班合わせて6つの新商品を提案し、なんと、そのうちの1つが商品化されることが決定したのです。

「実践的に活動したいと思っていた」と語る学生の増島さんは、「現実のビジネスの場はシビアです。『売れそう』『や』なんてなく『アイデアではダメ。まずは自分たちの考えをはっきりさせ、よく知ることです。授業では、問題点があると先生が指摘して終わりですが、ビジネスの現場はそうではなかった。経験できて良かった。』

「学生らしさを邪魔しないように」と最後まで静かに見守った二瓶喜博先生は、「このプロジェクトを始める前と終えた後では、学生の動き、発言時の自信が違った」と驚きを隠しませんでした。